

# 安らぎへの招き

すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。聖書

この聖書の言葉は、「イエス・キリストの安らぎへの招き」として知られています。

わたしが初めてこの聖書の言葉と出会ったのは、少し離れた教会で行われた特別集會に誘われて出席した時のことでした。教会に入って目に飛び込んできたのが、正面に掲げられていたこの聖書の言葉だったので、衝撃で目が釘付けになり、講師の説教よりも心に響きました。この語りかけが心から

離れず、翌晩は1人で出かけて、洗礼を受ける決心をしたのです。あれから45年余り経ちますが、この聖書の言葉と出会えたことは、これ以上ない幸いです。

あの時も今も、生きていくのは決してたやすいものではありません。今の方がはるかに便利になりました。しかし急激な変化は人々を疲れさせ、人と人の絆は弱くなり、心の余裕が無くなってきつております。多くの難問が目前に横たわっており、人々は安心や憩いを求めるようになってきています。

そうしたわたしたちに対してイエス・キリスト(以降はイエス)は、変わることなく冒頭の聖書の言葉のとおり、招いてくださっているのです。

この招きに実際に応じた者として、イエスの招きについて御紹介しましょう。

## イエスの招きの対象

人々が声をかけるのは、役に立ちそうな人や見所がある人などで、少なくとも不利益をもたらさないのが前提です。ですので、かわかることによつて大変な目にあったり、面倒に巻き込まれそうな人は避けるのが普通です。

ところがイエスは、常識を超えて、「**すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい**」と招いておられるのです。疲れ果て、弱り果て、助けを必要としている全ての人に手を差し伸べておられるのです。

イエスのもとには、当時の社会の弱者や忌み嫌われている人々などが続々と集まってきました。しかしイエスは、御自身を求めてくる全ての人を受け入れるばかりか、更に手を差し伸べて招いておられるのです。

## イエスが与えてくれる安らぎ

冒頭の聖書の言葉は、招きの最初の1節ですが、続いて、「**たましいに安らぎが来ます**」と告げられています。イエスが人々に与えようとしていたのは、その場しのぎの一時的な休息ではなく、「魂の安らぎ」だったので

身体はどんなに健康でも、人間存在の中心である魂に安らぎがありませんと、次第に疲れて弱ってきてしまいます。逆に魂に安らぎがありますと、身体はどんなに疲れていなくても、必ず元気を取り戻します。魂に安らぎが有るか無いか、わたしたちの生活を左右するのです。イエスはその鍵となる魂に安らぎを与えようとして、招いておられるのです。この広い世の中で、たった1人のただ1度の人生が、より豊かな祝福に溢れたものとなるように願われて。

イエスの招きにに応じて、魂の安らぎを得てから45年余りが経ちました。この間、様々な出来事に出くわしてきましたが、一時的に動揺しましても、必ず安らぎが与えられてきました。振り返れば幸いな日々でした。

イエスは今も変わることなく、招き続けてくださっていることを是非あなたにも知っていただきたいのです。魂の安らぎを得て、より充実した日々を過ごされるために。



牧師 和田 忠三  
プロフィール  
1947年愛媛県に生まれる  
住友重機工業団地に33年勤務する

どうして教会に行くの?

## 救いの恵みにあずかって



平野 敏子

私は6歳まで中国の瀋陽(しんやう)で、当時の瀋陽で育ちました。場合によっては中国残留孤児になったりしたかも知れませんが、瀋陽で妹が茶室失調で死んでいくのを見て、死ぬという事に異常な恐怖を覚えました。母は3人の子どもを連れて引揚げてくると心に力を使い、果たし、日本に戻ってからは病気が治ら

ずるほど、気が弱くなりました。しかし、いつかしなければ自分の人生が台無しになるような、心の中に将来に対して希望を注ぎ込まず、え世間的で心に平安がありませんでした。人間は何のために生まれ、苦しめ、痛み、疲れ果てて死んでいくのだろうか、とよく考えても分かりませんでした。

そんな中で銀行に就職し、やがて結婚し、2人女の子どもが生まれました。がこの頃の私の心が弱り、どうも子育てに疲れていたらよの不安で、自信もありませんでした。同じ年であつた夫も年若く、自分のことを精一杯、表面的なかわかりかたきい人でした。私に強苦悶すればするほど、気が弱りました。私自身も夫の気持ちを思いやることのできない者でした。夫は次第に自分の意見を言わない愛まで自己保護の強い人となり、家庭のことはすべて係り手となり、さらに25年以上車身赴任を繰り返して、独身のまま生きてきました。

このみ霊的約束の真実をしみじみ感謝している今日の頃です。その後、夫も今日の頃です。また人生を真剣に振り返り、豊中東教会で知り合った特別集會集会で、気が付けばイエス・キリストを信じましたと挙手していました。気が短くて怒りっぽくなったが、毎朝2人聖書を読み、賛美歌を歌い、お祈りして1日が始まっています。夫は、心から喜んで感謝し、肉体的な病にあふれてはかまっています。



平野敏子さんと夫の平野武男さん

クリスチャンのさまざまな体験を綴ります

心の故郷に帰つたような平安と希望に満ち、5年は経つた。夫と子が全く変わらない。寂しさをものすじ、苦しみがありません。しかし教会で語られる牧師の福音に満ちた聖書の言葉の説き明かしが心に平安を与えてくれました。

神は小さな困難も御存知で、私の人生を無意味、無目的に翻弄するものではなく、イエスさま御計画の中にあると信じて歩まされてきた。100%の確信を信じました。その上、100%の確信を信じて、夫も、ガク病発病後に離婚し思つて、夫も、ガク病発病後に不慮な神の御料理の中、もう一度やり直さずとなりなさい。私がイエスさまを信じて40年した、「人ははたかな

いが、神にはなんでもできるからであ